

勇者違いの転生記

トツポかもしれない

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひよんなことから勇者になってしまった普通の一般人。勇者としての人生を全うし、転生する権利を得る。そこで勇者はもう一度勇者になることを望むのだが……？

ドラクエ3はスーフアミベースで作っています。

もしかしたらスーフアミ以外にも混ざっていますが、オリジナルということが多めに見てね☆

目次

転生前・ドラクエ3の世界

プロローグ 始まりの大陸 | 1

第2話 ロマリア | 8

第3話 金の冠を取り戻せ | 13

転生前・ドラクエ3の世界

プロローグ 始まりの大陸

勇者になった。

なにも言ってるのか分からないが、もう一度言おう。

勇者になった。

ただの16歳のはずの俺が勇者だと告げられたのだ。魔王バラモスを打ち倒せ、と。魔王バラモスという言葉を始め聞き、気になることは山ほどある。

「なにをするにしてもまずは情報収集だ。」

城下町のおっさんから奥様、レーベの村の農民たちまで話を聞いたところ、魔王バラモスは知らないらしい。

なぜだ。いや自分も知らなかったから隠蔽されているのかもしれない。

「実際、俺に才能があったりするのかなあ!!?」

内心はしゃいでいるが、今のところは普通の冒険家と大差ない。悲しい事実である。

~~~~~  
情報収集やら探索やらしていると、魔法の玉をというものを手に入れなければ脱出できないうだ。

国王のチカラで船ぐらい乗せてくれればいいものを。

「よし、ナジミの塔に行こう。」

~~~~~

〈ナジミの塔〉

早速あることに気がつく。魔物が強いのだ。当たり前かもしれないが、魔物が強いのだ。

銅の剣に旅人の服で来た俺は格好の的だろう。せめてかわのたてぐらい買えば良かった。

「ああああ……」

完全に疲れた。びっくりするぐらい疲れた。よく考えたらここまで城から一睡もしていないのである。

レーベの村までで半日かかったことを考えるとよくもったな、と我ながら思う。そこで1度、城下町のマイホームに帰宅することにした。

〈アリアハン・城下町〉

「ただいまー。」

母「おかえりなさい。お城はどうだった？緊張しなかった？」

「まあ、大丈夫だよ。それより疲れちゃったから今日は寝るね。」

母「分かったわ。おやすみなさい。また明日も頑張るのよ。」

その後、緊張の糸が切れたかのように俺は熟睡した。いや、しすぎた。

~~~~~

「やばいやばいやばいやばいやばい」

昼だ。寝すぎた。

今日中にナジミの塔の最上階に住んでいるじーさんから盗賊のカギを頂かねばならないのに。情報収集だけしてても現物がなければ意味はない。

「とりあえずかわのたてだ。あとは…」

買い物を担当にすませ、ナジミの塔へ向かう。

2度目となるナジミの塔。今日こそは攻略してみせる。

道中の魔物は対して強くなく、落ち着いて進むことが出来た。かわのたてを買ったこともあるが、自分が成長したこともあるだろう。

くくくくくくくく

〈ナジミの塔・最上階〉

ドンドン

「なんだ？留守か？」

理由は不明だが部屋に人がいないのである。なぜだ。

とりあえず盗賊のカギを探してみようと思い、探し始める。

「これが盗賊のカギ……」

タンスの中に閉まってあったようだ。見つけて安堵した俺はそのまま塔を降り、レーベの村へと向かった。

くくくくくくくく

〈レーベの村〉

「魔法の玉ねえ……」

俺は困惑した。盗賊のカギを手に入れた方がいいが、どこに魔法の玉があるのか分からないのである。

とりあえず盗賊のカギで入れるところに入ってみよう。

くくくくくくくく

老人「それで？人の家入って来たど。」



「はい……いや……その……えーと……」

老人「勇者だからいいものの、人の家に無断で入るとはのお。」

「いや……すみません……。でも魔法の玉が無いとこの大陸から出れなくて……」

老人「分かっている。これが魔法の玉じゃ。」

そういつて老人が見せてくれたものは、いかにもといった見た目をしていた。

「これが……魔法の玉……」

老人「そうじゃ、勇者よ。これをそなたに授けよう。魔王を倒すその日を、心から待つ

ておるぞ。」

「ありがとうございます。」

~~~~~

なんでもおっさんによれば、この先にいぎないの洞窟があるらしい。

魔法の玉を持った俺は、魔物を倒しつついぎないの洞窟へと向かった。

~~~~~

〈いぎないの洞窟〉

「爆破じゃあああああ!!」

俺はテンションが高ぶっていた。びっくりするほどに。

「点火あ!」

近くに老人が居た。壁を壊せと申されるとすたすたと遠ざかって行った。

ならば爆破するしかない、というわけで今現在爆破中である。

ズゴガボーン!!

壮大な音を出しながら、壁は消えた。

洞窟内は比較的整っており、魔物も外よりは強いが苦戦しない程度の強さであった。

~~~~~

〈旅のとびら前〉

「ここが…旅のとびら…?」

俺は困惑した。心の中で困惑を繰り返していることではなく、旅のとびら(?)を見てだ。

なにやら青い光を発し、渦巻いている。

「ここに入るのか…?」

悩んだ末、俺はこの渦に入ることにした。

足を一步一步慎重に進める。

足が渦に触れる。

その瞬間視界が歪む。

目眩を強くしたみたいなものだ。

俺はどうなる？死ぬのか？

第2話 ロマリア

気がつくとなんは謎の建物にいた。

まわりを見渡すとなにやらほこらみみたいな雰囲気だ。

「もしかして本当に旅のとびらつてやつだったのか？」

我ながらよく分からないものに飛び込んだことが凄いと思った。

とりあえず近くに町がないか探そう。

くくくくくくく

〈ロマリア領〉

ここの魔物はいざないの洞窟よりも強く、少々手こずった。しかし、勇者の力があればなんのこれしきと言わんばかりに倒していった。

「城が見えるな。あれが噂に聞くロマリアか？」

城を気にしていた俺は近くのキャタピラーに気づかず、不意打ちを受けてしまった。

落ちて着いて距離をとり、体制を整える。

「ギラー！」

最近覚えた閃光魔法だ。さあどうだ？

キヤタピラー「シヤアアア！」

効いてはいるが致命傷ではないか。なら…

「ギラー！」

もう1発お見舞いしてやる。それだけのことだ。

キヤタピラー「アアアアア……」バタツ

どうやらやれたようだ。この辺りで1番強いかもしれん。ロマリアについたら武器を買おう。銅の剣じゃ心もとない。

俺は、ロマリアへと進んでいった。

~~~~~

〈ロマリア城下町〉

あの建物を出た時は昼前だったのだが、今はもう夕方だ。王様への謁見は明日にするとして今晚の宿を探すことにしよう。

あそこが良さそうだな

「おっちゃん、ここいくら？」

宿屋の店主「1人なら3ゴールドだよ。広い部屋がいいなら4ゴールドになるけどね。」

「いや、広くなくていいな。はい、3ゴールド。」

宿屋の店主「あいよ。ごゆっくり。」

俺は、3ゴールドを支払い部屋に向かった。部屋は、ベットとある程度の広さがあった。疲れていた俺は、ベッドに横たわるとすぐに寝てしまった。

次の日、目が覚めると心地のいい日が入ってきた。

今日は新しい武器を購入しよう。1000ゴールド持っていれば、ある程度はいいものが買えるだろう。

早速武器屋が見えてきた。

「どの武器にしようかなー」ワクワク

武器屋「いらっしやい!どの武器にするかい?」

「そうだな、この店で一番の武器はなんだ?」

武器屋「その身なり…あんだ、勇者だろ?」

「ええ、まあ一応。勇者です。」

武器屋「それなら、これなんてどうだ?うちの店に1本しかないはがねのつるぎだ。少々値がはるが、必ず冒険に役立つはずだぜ!」

「おいくらでしようか?」

武器屋「本来なら1500:2000ゴールドはいきたいが、魔王を倒すっていう勇者様だ。特別に10000ゴールドでどうだ？」

正直ぎりぎりである。だが、銅の剣しか持っていない俺にとつてはめちやくちや欲しいつるぎだ。

「買います。」

武器屋「あいよ。そのどうのつるぎはこつちで買い取るかい？」

「お願いします。」

武器屋「わかった。」

銅の剣と引き換えに75000ゴールドを手に入れた俺は、薬草を買いに道具屋へと向かった。

道具屋「いらつしやい。なにをかうかい？」

「薬草を5つ。」

道具屋「おつ、薬草かい。5つなら40000ゴールドだよ。」

400000ゴールドを置き、今日はなにをするか考える。新しい武器も手に入ったし、ここは一つ、勇者らしいことでもするかなあ。

どうしようかなあ。ハハッ

道具屋「……い、おーい」

「ん…ああすみません。ぼーっとしてました。」

道具屋 「何考えてたんだ？まあいいや。ほれ、薬草だ。」

「ありがとうございます。」

道具屋 「また来てくれよな！」

さて、勇者らしいことといえば謁見です。そう、謁見です。ロマリアの国王様にご挨拶に行こうと思います。

アリアハン王以外の国王にお会いするのは初めてだからなんだか緊張しちゃうなあ。笑みがこぼれそうになったが、落ち着いて城へと向かった。

〈ロマリア城前〉

よし、ついた。さあ謁見…

門番 「すまないが本日はもう城へは入れない。また明日来てくれ。」

えっ…まじ…？

俺、宿屋で熟睡しちゃった？

あつ、よく見たら夕方だ…



### 第3話 金の冠を取り戻せ

宿屋で大人しくもう一泊した俺は、謁見へと向かった。

門番「こんな昼下がりに謁見とは。勇者様は忙しい身分ですな。」

こいつ絶対昨日の門番だ。夕方に来たの追い払いやがった門番だ。

「ええ、まあ魔物を適当に倒して参りました。」

嘘です。寝てました。ごめんなさい。

門番「ご苦労さまです。どうぞ、お通りください。」

ようやくロマリア城内へと入ることができた。城に入るために2日かかった勇者は俺だけではないだろうか。なんだか情けなくなってきた。

王様「おお、勇者よ。そなたに頼みがあるのだが。」

「頼みとは一体どのような。」

王様「実はわしの金の冠がカンダタという盗賊に盗られてしまつてな。そこで……」

「それを取り返してこい、という訳ですな？」

王様「うむ。奴は西にあるシャンパーニの塔におる。」

「承知しました。」

「それぐらい国の兵士に任せたらどうなんだろうか、とか思いながら話を聞いた。さて、準備して早速向かいますか。」

~~~~~

うーん、どうしよう。え？どうしたのかって？あつ聞いてないソウデスカ。

……いや聞いてくれなくても話すけど。

困ったことにゴールドが足りないんだ。鋼の剣買ったせいで。防具が皮の盾と旅人の服というシヤレにならない状態のなかここまで来たのが驚きだ。今あるのが72ゴールド。皮の鎧すら買えない。敵を倒せるだろうか。こないだはキヤタピラー一体だったからなんとかなったが、一体しか出ないとは限らない。うーん困った。

……閃いた。キメラの翼で帰ろう。

「ええつと確かキメラの翼は……」ゴソゴソ

……ない。買わないと。なんでキメラの翼の1つも持ってないんだろう。

道具屋はすぐそこだが、一応早歩き程度には急ぐ。

「すみませーんキメラの翼くださいー1つでいいです。」

道具屋「あいよ。25ゴールドだ。」

25ゴールドを出しつつ、なぜ全財産の3分の1を取られなければならないんだと思つた。ゴールドないのは自分のせいだが。

早速キメラの翼を使い、アリアハンへ飛ぶ。世界を救う勇者様のはずがキャタピラーとかいうイモムシもどきの魔物に苦戦するから、とかいう理由で故郷に帰るの少し間抜けのようにも思えるが、死んでしまっただけは元も子もない。

~~~~~

アリアハンについた俺は家に帰るのは少し気が引けたので、そのまま町の外に出てモンスターを狩ることにした。

「この辺の魔物は洞窟の魔物よりも弱いな。気持ち的にも余裕があるぞ。」

なーんて口走りながら周りのスライムやらおおがらすやらを倒し、確実に成長していく俺。

レベルアップ、ってやつだろう。勇者として強くなっていく実感がある。

……というより鋼の剣、強くない？俺より武器の成長がすごいよコレ。

まあそんなことはよくて、前よりも楽に魔物を狩れるようになった俺はもう一度ロマリアへ戻ることにした。

「戻る前に皮の鎧でも買っておくか。忘れるところだった。」

現在の所持金は160ゴールドといったところだ。100ゴールド分ぐらいしか狩りをしてないが、強くなったので十分だろう。ちよつと前に覚えた閃光魔法『ギラ』が一回で複数の魔物に攻撃でき、とても優秀であると思われた。

それじゃ、アリアハンに戻りますか。

~~~~~

「おっちゃん、皮の鎧1つくれ。」

武器防具屋「あいよ、150ゴールドだよ」

俺はためたゴールドで皮の鎧を買い、早速装備した。今までの旅人の服よりも確実に
防御力は上がっているだろう。防具も買ったので、ロマリアに戻るとしよう。

……あれえ？キメラの翼どこお？